

4. 『第三帝国の国際スポーツ政策』（タイヒラー）の翻訳

上野 卓郎

1999年9月末、4年にわたった翻訳が一応完了した。そこで、11月1、2日の妙高高原での合宿研究会において「タイヒラー『第三帝国の国際スポーツ政策』の翻訳・報告」と題して、翻訳作業の経緯、その原著の研究史的意義、原著誤字・脱落・挿入（「正誤表」として作成した）などを報告した。報告では、「目次」で全体像を示し、「序説」、「第20章 総括」、「付録」により研究の到達点を確認することを中心課題としたが、報告時間を大幅にオーバーしてしまった。源泉資料に基づく原書叙述の要約は困難で（前半部分で頓挫）、報告では断念することとした。本稿では報告の中心課題の部分の論稿化を省き、翻訳の経緯についてのみ記すことにしたい。

原著は1990年にポッフム・ルール大学スポーツ科学学部に博士論文として受理され、1991年にドイツ・スポーツ同盟科学叢書第23巻として公刊された。約400頁に及ぶ大著で、13の表以外は活字だけである。

著者タイヒラーとは1984年来日を契機に親交を深め、1986年の私の在外研究でのボン・アルヒーフ調査期間の全面協力、1989年ベルリンの壁崩壊直後の東独スポーツシステム研究文献の送付など、彼の存在なしでは私の研究の展開はあり得ないほどの関係を育んできた。1991年ヘルシンキ労働者スポーツ世界会議への途次、フランクフルト駅でボンの彼にボン到着時間を知らせる電話の最中のバッグ置き引きで、会えなくなったことは今でも残念でならない。この時彼は完成した論文の公刊に携わっていたはずだし、ボンの議会での社会民主党スポーツ政策担当の仕事をしていたからである。

1994年夏プラハ・アルヒーフ調査への途次、その直前ポツダムに教授就任したばかりの彼と会う

べくボンからポツダムに。ここで8年ぶりに再会、彼の著書を贈呈される。著書にサインペンで「1994年8月26日サンスーシへの私たちの共通の訪問の思い出に、そして結びつきのなかで私の同僚上野に捧げる」と書いてくれた。この時期共訳者と分担翻訳しようと考えていたが、1995年在外研究の地をポツダム／ベルリンに定め、それまで素読みしていた著書の翻訳を本格的に開始したのは1995年5月ポツダム大学スポーツ科学研究所のタイヒラーの研究室（スポーツ社会・現代史部門）の自由利用とタイヒラーとの会話、参照したい源泉資料の貸与などの環境を得てからであった。

共訳者の協力が不確かになるなかでとりあえず分担の著書後半部分の翻訳に打ち込み、7月末に訳出ノートを完了。8月ポツダム・ブンデスアルヒーフで日独スポーツ関係史資料調査（タイヒラー要望の「補論」執筆のため）。1996年3月帰国後、ポツダムでの訳出ノートのワープロ入力と前半部分の訳出・ワープロ入力を他の仕事の合間に続け（途中1年程手付けず）、1999年9月末にやっと完了した。その結果、ワープロ原稿（40字×40行）455枚（400字原稿用紙換算1820枚）となった。引き受け先未定の出版化の話はこれからである。

翻訳作業の中で痛感したのはベルネットなどの先行研究の翻訳の欠落による困難であった。ドイツ・スポーツ現代史研究の我が国での蓄積が案外と浅かったと言わざるを得ないという実態に愕然としたのである。タイヒラーの著書の翻訳出版によってこの実態に風穴をあけることができれば、学問的に地道でも僅かながら貢献することになる。そうした思いを強めて翻訳の手直しを繰り返し、本稿で省略した中心課題（「解説」に該当）の論稿化に迫っているところである。